

23-1 資本にとっての一労働日

「一労働日とはなにか？」資本によって日価値を支払われる労働力を資本が消費してよい時間はどれだけか？労働日は、労働力そのものの再生産に必要な労働時間を越えて、どれだけ延長されうるか？……資本は、剰余労働を求めるその無際限な盲目的な衝動、その人狼的渴望をもって、労働日の精神的な最大限度だけではなく、純粹に肉体的な最大限度をも踏み越える。……生命力を集積し更新し活気づけるための健康な睡眠を、資本は、まったく疲れきった有機体の蘇生のためにどうしても欠くことのできない時間だけの麻痺状態に圧縮する。ここでは労働力の正常な維持が労働日の限界を決定するのではなく、逆に、労働力の一日の可能なかぎりの最大の支出が、たとえそれがどんなに不健康で無理で苦痛であろうとも、労働者の休息時間の限界を決定する。資本は労働力の寿命を問題にしない。資本が関心をもつのは、ただただ、一労働日に流動化されうる労働力の最大限だけである。資本が労働力の寿命の短縮によってこの目標に到達するのは、ちょうど、貪欲な農業者が土地の豊度の略奪によって収穫の増大に成功するようなものである。」（大月版『資本論』①P346F3-347F8）